



一橋大学には、ユニークでエネルギッシュな女性が豊富と評判です。彼女たちがいかにキャリアを構築し、どのような人生ビジョンを抱いているのか？ 第28回は、国内外の金融業界を生き抜いた経験をいかし、現在は金融専門の人材サービス業で活躍する霍野菜穂子さんです。聞き手は、商学研究科准教授の山下裕子です。

バブル 泡から生まれた真実

バブル経済のご真ん中で
大金を動かす

山下 霍野さんは男女雇用機会均等法施行の第1世代ですね。ずっと金融の世界、それも外資や海外で活躍してこられました。もともと、どのようなキャリア像を描いていたのですか。

霍野 最初は、日本の信託銀行に入社したのです。「第1世代」とはいつても、1つ上の先輩がエントリーは男女別々、女性は制服を着て働くという現実を見ています。総合職として営業店で働くよりは、投資に関わる仕事の方が面白そうとファンド・マネージャーを希望しました。2年で、外資系の金融機関に転職しました。その後も再度ヨーロッパ系の金融機関へ転職しました。私のスペシャリティは金融派生商品の営業です。時代という追い風の中、立ち止



霍野菜穂子 (つるの・なほこ)

1986年一橋大学法学部卒業。川井健ゼミ。

同年より、安田信託銀行にて2年間勤務の後外資系金融機関へと転職。

その後数回の転職を経て、1998年にイギリス・ロンドンへ渡る。

2011年に帰国、NEW MILLENNIUM GROUPにて人材サービスに携わる。

NEW MILLENNIUM GROUP

霍野菜穂子氏



Nahoko Tsuruno

商学研究科准教授

山下裕子



Yuko Yamashita

まる暇もなく目指すゴールにも疑問を感じることもなく、ただ走り続けていたという感じです。そして気がつけばイギリスに移り住んでいた(笑)。

山下 キャリアのスタートが、バブル経済の真っ最中、映画の『ウォール・ストリート』の世界でしたね。

霍野 米国債は日本が買い占め、今の中国みたいなパワーがあった時代でした。1000万ドル以下のロットでは売り買ひしない、など考えたこともない金額が電話一本で取引されるわけです。今思うと甘いけれど、自分のパワーが急激に増大したような感覚でしたし、テレビゲームの世界に身を置いているようでもあった。現実味は感じられないけれど、ゲームを始めたからには上手くなりたいという気持ちでした。

山下 向上心が、ヨーロッパの厳しい金融業界で生き抜くタフさを養った要素ですか？

霍野 それもあるでしょうが、1998年にロンドンに行き、世界は日本だけじゃないんだと身をもって知らされたことが転機になったと思います。「違うこと」が尊重されるイギリスの文化に触れ、初めて自分の人生を見直そうと思いました。自分の仕事はどれぐらい世の中の役に立っているのかに疑

問を持つようになったのです。今から思えばその後転職を繰り返したのも、答え探しの一つだったのかもしれません。

金融業でのスキルセットが、 ファイナンソフイーを改革した

山下 シティ*1の人々は、チャリティにとっても熱心だそうですね。

霍野 いろいろな人が様々なチャリティ活動をしているものだから、しょっちゅう募金のお願いが回ってくるんです。

山下 芸術の財団の経営に関わられるようになったのですが、きっかけは、何だったのですか。

霍野 募金のどれぐらいが目的のために使われるのか、具体的に考えれば考えるほど現実味がないように思っていました。

山下 B B C等を見ると、社会貢献活動について相当突っ込んだ議論をしていますね。小さな虚栄心のために支援先の発展を逆に妨げているのではないか、活動運営の非効率性のために活動のための活動になっていないのでは、等々。

霍野 そんな時に趣味として楽しんでいたモダンアート鑑賞で出入りしていたC A S*2から、ファンドレイジングの相談が私のもとに来ました。「寄付が今までのように集まらない」ということでした。これをファイナンソフイーというよりは新しい資金源を探すプロジェクトとして手伝い始めました。これが自分でもびっくりするぐらい面白かったです。その時に初めて自分の経験とスキルセットに感謝しました。金融の知識とかいう狭いものではなく、クロスボーダーでコミュニケーションができることや、高

い仕事のモラル、そして結果主義なことまでも。

山下 ロンドンでのお仕事も順調そうで、新たな生きがいも発見し順風満帆という印象ですが、この度13年ぶりに日本で仕事されることになったのはなぜですか？

霍野 ロンドンでの生活は、大変心地よく正直日本に戻るつもりはありませんでした。ところが、ちょうどC A Sのプロジェクトを手伝い始めた直後に母が手術をすることになって、一時帰国しました。大事には至らなかったものの、母が随分小さくなってしまったように思えて、ショックでした。

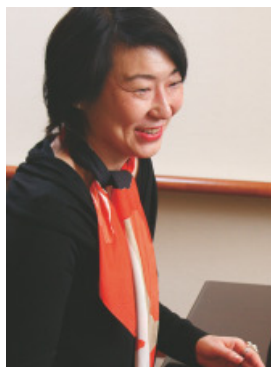
それまでは、自分のやりたいことを第一に考えていましたが、この時初めて真剣に帰国を考えるようになってきました。

山下 帰国後の仕事について教えてください。

霍野 東京での仕事を探し始めた頃、今の会社であるNEW MILLENNIUM GROUPからオファーをいただき、勤務することになりました。業務は金融エグゼクティブのヘッドハンティングです。

バブルから20年。 日本は、話題にものぼらない国 になってしまった

山下 海外の同僚に帰国を残念がられたのではないですか。



*1 シティ・オブ・ロンドン (ザ・シティ) = ロンドンの金融街。

*2 CAS/Contemporary Art Society

霍野 個人的にはそうですが、ショックだったのは

「東京へ帰ってもつまらないと思うよ」と全員に言われたことです。世界を相手に働いていると、その時々日本の立ち位置が見えてきます。プレゼンスが落ちていっているより、話題にもものぼらないんです。一人の同僚が「ナホコが帰るんだっから行ってみようかな」と言ってくれましたが、日本が海外から「訪れる価値のある」と思われる国になってほしいと心から思っています。



山下 私たちの研究の世界でも、まさに今、その問題と戦っているんですよ。

霍野 シティの人たちは誰一人として「ヒトツバシ」を知らないんです。これも悔しかったですね。

山下 “一橋を世界にアピール”する、といっても、人がいない、お金はない、現状では効果的なアピールは難しいという焦燥感があります。

霍野 企業のCSRにしてもリアルレポートの扉でお経のように唱えるだけの会社が多いですけれ

対談を終えて

Vintage Champagne

霍野さんは謎の女だ。

1年後輩の彼女との出会いは、新入生のオリエンテーションだった。当時からとても不思議な魅力の持ち主で、個性が際立っていた。とびきり仕立てのよいワンピースを身にまとった優等生のお嬢さんなのに、規制の枠におさまらず、どこかはみ出す。そのアンバランスさが何ともいえないユーモラスな味わいを醸し出し、彼女自身、それを面白おかしく戯画化するものだから、いつも大笑いであった。映画やアート鑑賞に明け暮れていた私の、訳のわからない前衛趣味に「面白そうですね!」と付き合ってくれたのが彼女だった。シネヴィヴァンの柿落しだったゴダールの『パッション』や、『コヤニスカッティ』なども一緒に見に行った。都会の刺激に現をぬかしていた私とは違い、授業にも皆出席だった。「菜穂子ちゃんは、どうやって時間を作っているの?」謎の始まりである。

最初の転職先だったドレクセルの破たんあたりから、謎の女ぶりが露わになる。「出社したら誰もいなかったんですよ〜」と、いつものように笑い話を聞かせてくれたが、若い身空で、どうやって残務処理ができたの? と思っていたのもつかの間、最先端の金融の世界を優雅に泳ぎ始めたではないか。

若い彼女の成功を嫉んだ秘書の女性に詰め寄られた時の話を今でも覚えている。「数式を一つ見せたんです。切った張ったの世界の背後にも論理がある、って」ブラック=ショールズモデルだったそうだ。

ロンドンで新しく花開いた、アート財団のマネジメントの活動の話を聞き、謎の女の真実が垣間見えた気がした。

グローバル金融時代の大波の中を突っ走った人生、さぞかし大変だっただろうに、苦勞を見せない。愚痴や悪口を聞いたことがない。いくつゼロが違う世界に住んでいるのか見当もつかないが、慎ましい世界に生きている私のような旧友に負い目を感じさせない。

ふと頭に浮かんだ言葉が、「君子の交わりは淡き水の如し」。礼記の対句に「小人交甘如醴(甘酒)」とあるように、愚痴や悪口は、瞬間は甘い蜜の味かもしれないが、関係を腐らせ人格をジワリジワリと蝕む。さらさらと気持ちのよい関係を支えるのは、知性や人間性だろう。

バブルは消えるが、人間は残る。

年代物のシャンパーニュのように、深みを湛えた彼女と久しぶりに再会して、自分では決して味わうことのできなかつた人生との出会いを作ってくれた我が母校に心から感謝した次第である。年代物のシャンパーニュは、泡がまるやかに抜け、芳醇で濃厚、そして甘いそうだ。謎の女は、水のようにさらりと醴酒を飲み、決してそれに溺れたりしない。(山下裕子)

ども、大学ともなるとさらに、課題は多そうですね。資金や人材が少くないという問題でとどめずに民間企業と面白いプロジェクトが考えられるのではありませんか。これだけ世界中でOBが活躍しているのですから、学生をトレイニーで働かせてもらおうとか、空白の20年を取り戻すには小さい一歩から始めていくしかないのではないのでしょうか。

山下 最後に海外で活躍し続ける秘訣などありましたら教えてください。

霍野 日本人には多いタイプですが、私も10代の頃から与えられたものを完璧にこなすことをトレーニングしてきたわけです。でも、それだけじゃ、ロンドンではランチ一つ満足には食べられません。お昼にサンドイッチを食べようと店へ行くと、どんな種類のパンにする、チーズの種類は、中身のチョイスは、ドレッシングの種類は、と下町訛りでまくし

立てられる(笑)。私は英語があまり得意じゃなかったし、留学経験もなかったから、最初はまったく聞き取れなくて、それこそ何十回も聞き返しました(笑)。そうすると次に行つた時、その人が覚えていて「ハロー」と声をかけてくれるんです。実は、仕事の面でも、朝は誰にでも挨拶することがとても大切。些細なことからコミュニケーションの糸口がつかめてくるのだと思います。

だと思えます。

